「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム　テーマ名：若者

課題	団塊の世代の後期高齢者化と物価高は、梅干しの消費量が多い高齢者層の購買力の低下を招く可能性が有る。そのため、若い世代の梅干しの消費量を増やすことが重要となる。
目標	そこで、若い世代への梅干しや梅関連製品の需要拡大、みなべ町の梅栽培に関する認知拡大について、関西の大学生と共に考え活動する。需要・認知拡大の切り口としては「ふるさと納税返礼品」、SNS等による情報発信、アスリート対象のプロモーション等を検討している。また、それらの活動をきっかけとして、関西の大学生の大学を越えたつながりを築くことにより、関係人口を増やす。

	活動内容	成果	関係（連携）団体
令和6年度　活動実績	① 武庫川女子大学経営学部（8/5～6）12名・教員1名、ソフトバンク社員1名参加 内容：うめ振興館見学、体験（梅干・梅ジュースづくり）、ウミガメ研修、ふるさと納税返礼品レクチャー、梅料理体験、ソフトバンク社員講師による生成AIを活用したワークショップ（南部高校生も参加）	・武庫川女子大学と連携協定締結。学内のイベントで学生がみなべ町紹介 ・ソフトバンク、ローソンに提案 ・ふるさと納税返品についての提案	・武庫川女子大学 ・ソフトバク ・（ローソン） ・梅料理研究会
	② 大阪キリスト教短大グローバルDXコース（11/7～8） 学生8名（うち5名はアジア人留学生）・教員2名参加 内容：うめ振興館、たかだ果園、紀州ほそ川工場、交流会、バイオ炭＆紀州備長炭振興館、ぷらむ工房・梅干しづくり体験、ふりかえりワークショップ	・梅を使ったアジア料理づくり ・『学校法人』という雑誌に「SDGs未来都市におけるSDGs地域貢献プログラムに関する考察」寄稿	・大阪キリスト教短大 ・みなべ国際交流クラブ、「みなべ梅をwo炭クラブ」
	③ 阪南大学サッカー部（12/1～2） 学生7名・教員1名参加 内容：梅の里スポーツフェスタ、つるの湯温泉、梅干に関するアンケートを元にワークショップ、交流会、旧清川中にてキャンプ、鹿島渡岸、国民宿舎温泉	・継続的にみなべ町と交流 ・上赤坂ゼミにおいてスポーツと梅についての考察を継続的に実施	・阪南大学サッカー部 ・NPO法人梅の里スポーツクラブ
	③　立命館大学経営学部（1/19～20） 8名、教員1名 内容：うめ振興館、たかだ果園見学、バイオ炭に関するレクチャー（高槻バイオチャー研究所島田所長、みなべ梅wo炭クラブ）、炭化炉見学	・立命館大学とは、日本バイオ炭研究センターとの連携により、複数の教員が学生とともに訪問。バイオ炭事業化を支援	・立命館大学 ・高槻バイオチャー研究所 ・みなべ梅wo炭クラブ

振り返りと今後の展望	令和6年度の成果として、4大学がフィールドワークを実施した。それぞれ充実した合宿を行うことができ、「ふるさと納税返礼品提案」「アジア圏への梅料理の紹介」「アスリートへの梅商品紹介」「バイオ炭事業への提案」等をいただいた。令和7年度は上記大学に加え、京都産業大学からの連携の申し入れもあり、地域と大学が連携する域学連携事業を拡大させていきたい。また、大阪での学生イベントなども開催し、若い層の関係人口（応援人口）を拡大していきたい。

「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム　テーマ名：若者

①　武庫川女子大　経営学部　谷口ゼミフィールドワーク（8/5～6）
学生12名、教員1名、ソフトバンク社員1名

2024-8-8　紀伊民報

町の魅力 どう伝える

武庫川女子大の学生
みなべで研修

武庫川女子大学（兵庫県）の学生17人が5、6日、研修でみなべ町を訪問し、同町を訪れたくなる「ふるさと納税」の返礼品を考えるためのフィールドワークに取り組んだ。地元の南部高校では、生徒とともに「生成ＡＩ（人工知能）」を活用し、返礼品のパンフレット画像を作製した。

みなべ町は、5月に国の「ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）未来都市」と「自治体ＳＤＧｓモデル事業」に選ばれている。モデル事業の一つとして町と武庫川女子大学が連携し、若者の目線で町の魅力をＰＲする方法を考えようと、研修を実施した。

研修には、武庫川女子大学の経営学部教員で、社会連携推進センター専門員の谷口浩二さんのゼミ生17人が参加した。このゼミでは、三重県、香川県の自治体とも連携し、学生がふるさと納税の返礼品について考え、提案する活動に取り組んでいる。

ソフトバンクの社員（左端）から「生成ＡＩ」の活用や注意点などについて教わる、南部高校の生徒と武庫川女子大学の学生＝6日、みなべ町芝で

みなべ町を訪れた学生は、梅ジュース作りや梅を使った料理作りを体験したほか、梅への理解を深めたほか、全国有数のアカウミガメの産卵地として知られる千里の浜も訪れるなどした。

また、高校生と意見を交わす機会を持ちたいと、南部高校を訪問。同校の生徒5人とともに、武庫川女子大学と連携協定を結ぶ「ソフトバンク」（本社・東京都）の社員から生成ＡＩのビジネスへの応用に関する講座を受けた後、実際に生成ＡＩを使って梅干しや梅酒、ウミガメなどをＰＲする画像を作製した。

学生は今後、研修を通じて体験したことや学んだことを基に、体験型の返礼品のアイデアを具体化。今秋をめどに町に提案する方針という。

参加した南部高校食と農園科3年で生徒会長の谷本悠郎さん（17）は「趣旨が伝わるかどうかやすい画像ばかりで、学生の皆さんのレベルが高いと思った。生成ＡＩと聞いて何も分からず、難しそうな印象だったが、話を聞いて体験し、高校生でも活用できると感じた」と話した。

「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム　テーマ名：若者

②　大阪キリスト教短期大学　グローバルDXコース（11/7～8）
アジア留学生（5名）、日本人3名、教員2名

教育テックで変える未来社会（第 21 回）

「SDGs 未来都市」選定地域における「SDGs 地域貢献プログラム」に関する考察
～和歌山県みなべ町での SDGs 地域貢献研修を事例に～

OCC 教育テック総合研究所 上級研究員
教育テック大学院大学 教授（2025 年 4 月就任予定）　大和田 順子
総務省・地域力創造アドバイザー

1．はじめに

1－1．国内の初等・中等教育における SDGs 教育の位置づけ

SDGsについて、国内の様々なセクターで取組が進んでいる。2024 年時点で SDGs の国内における認知は約 9 割に達している[1]。また、近年の環境保全に関わる国内の政策では、令和 5 年度の「環境白書」で、「直面する数々の社会課題に対し、地域循環共生圏の構築や GX 等の取組を加速させ、炭素中立（ネットゼロ）・循環経済（サーキュラーエコノミー）・自然再興（ネイチャーポジティブ）の同時達成を実現させることで、環境・経済・社会の統合的向上につなげること」[2]が謳われるなど、炭素中立・循環経済・自然再興への取組が各界で進んでいる。自治体においては内閣府の「SDGs 未来都市」が 2018 年度から始まり、認定された未来都市数は 2024 年 5 月の認定で 206 都市となった[3]。

教育面では、「持続可能な開発のための教育」（ESD: Education for Sustainable Development）が、2002 年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」において、日本が「国連持続可能な開発のための教育の 10 年（2005 年～ 2014 年）」を提唱し、国連総会で採択された[4]。文部科学省によれば、ESD は、気候変動や生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大など、人類の開発活動に起因する現代社会の様々な問題を、各人が「自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動」である。つまり、「ESD は持続可能な社会の創り手を育む教育」であるとされている[5]。

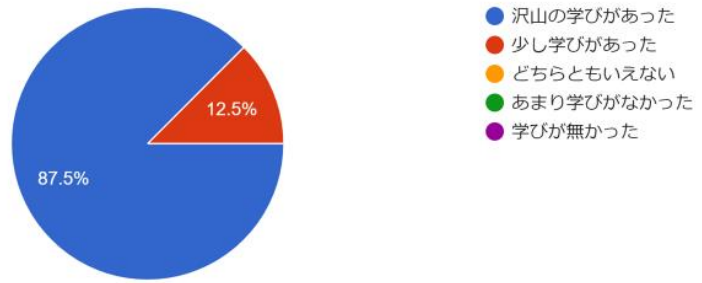
ESD と SDGs の関わりは、SDGs の目標 4「質の高い教育をみんなに」に盛り込まれており、ターゲット 4.7 では、「2030 年までに、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」ことが掲げられている。

また、SDGs の理念は、最近の改訂で学習指導要領に盛り込まれ、幼稚園・小学校（2020 年度より全面施行）、中学校（2021 年度より全面施行）、高等学校（2022 年度より施行開始）のそれぞれで施行されている。「持続可能な社会の創

参加者アンケート結果

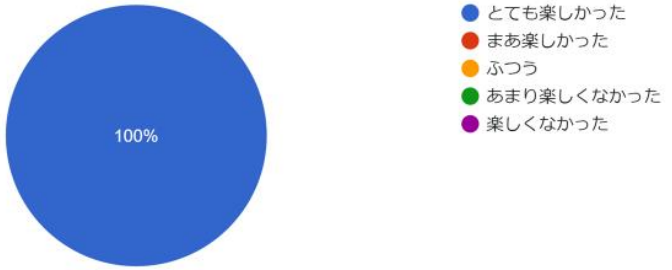
1．みなべ町SDGs地域貢献研修について

8 件の回答

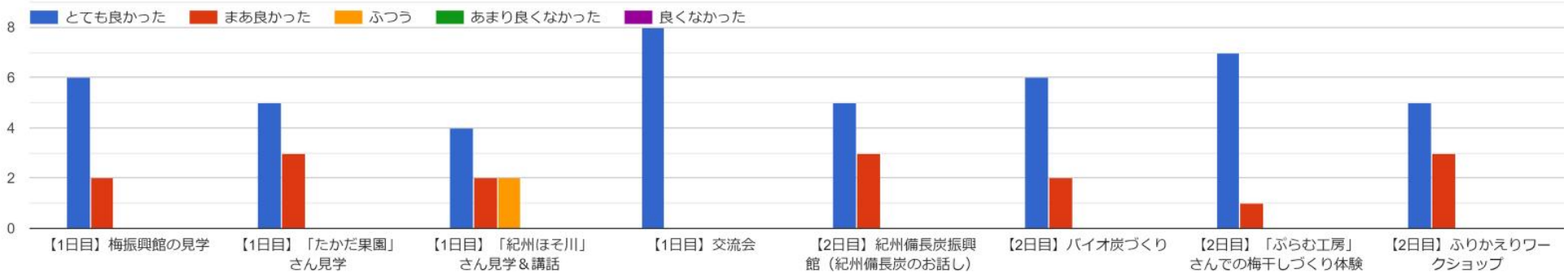


2．みなべ町SDGs地域貢献研修について

8 件の回答



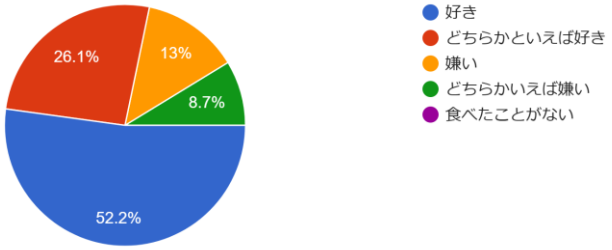
3．それぞれの活動について当てはまるものを一つ選んでください



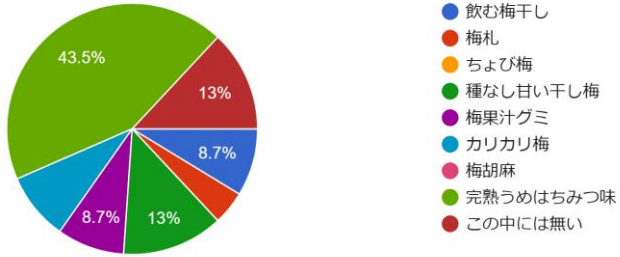
③　阪南大学サッカー部　12/3（教員1名　大学生7名　中学生6名）

③ 阪南大学 上赤坂ゼミ　事前アンケート

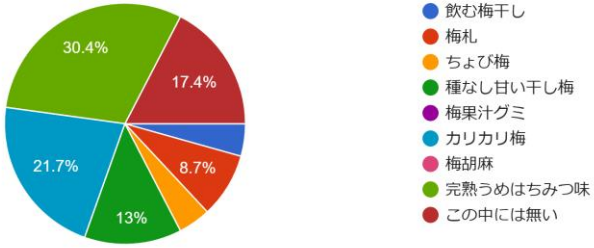
梅干について
23 件の回答



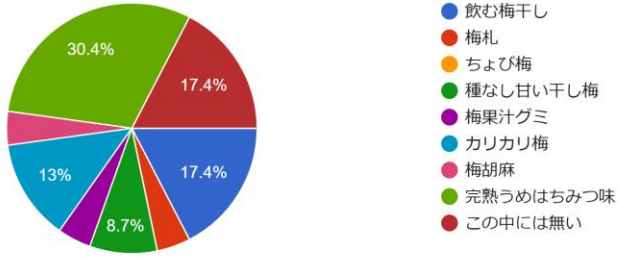
試合前に食べたい商品
23 件の回答



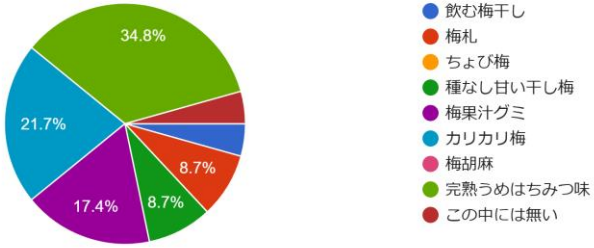
ハーフタイムに食べたい商品
23 件の回答



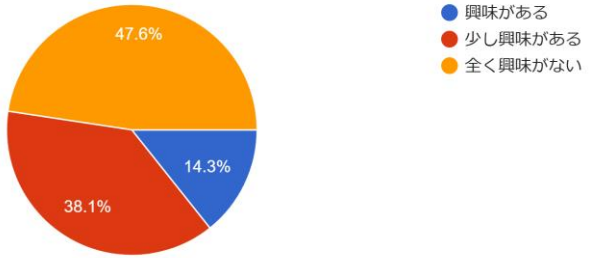
試合後に食べたい商品
23 件の回答



友達やチームメイトにおススメしたい商品
23 件の回答



６月に梅収穫のアルバイトが有ります
21 件の回答



「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム　テーマ名：若者

④　立命館大学経営学部　ラウパッハゼミ合宿、学生10名（1/19～20）